

全日本少年北海道大会

2014年6月28～29日

会場：空知川河川敷サッカー場（滝川市）

【報告者】HFAテクニカルスタディグループ

優勝：SSS

準優勝：FC DATE

3位：プログレッシブ十勝FC
室蘭大沢FC



個と関わり～その質の向上をめざして～

北海道5ブロック予選を勝ち抜いた16チームが、滝川市河川敷サッカー場に集結した。今回は準決勝の観戦と決勝の詳細な分析を通して、北海道の個の育成について考察した。

1. 大会の概要

道内15地区の予選からさらに、5ブロックによる予選を勝ち抜いたチームによる大会で、今回は、札幌4、道央、道南、道東、道北からそれぞれ3チームが参加し、計16チームによるトーナメント方式で行われた。

8人制大会で、試合時間は40分（20分ハーフ）。1人制審判で1日2試合を戦うレギュレーションとなっている。

縦方向の風が強く、ピッチの凹凸が多かったため、これらがプレーに影響することもあった。

今大会で優勝したチームは、8月4～9日に静岡県で開催される全国大会に出場する。

2. ゲームの傾向

(1) 決勝戦のデータ

ボールポゼッションの回数(4本以

上連続してパスが通った回数)について、1試合を通した両チームの合計は7回(前半4、後半3)、回数の多いチームは5回であった。

スローインの成功回数(スローインから意図的に2本パスが通った回数)について、1試合を通した両チームの合計は5回(前半2、後半3)、回数の多いチームは3回であった。一方で、失敗の回数は合計で22回であった。成功率27.2%というのは、昨年の全国大会全出場チームの平均44.5%（ベスト8進出チームは61.0%）とは大きな差がある。

シュートの本数は合計18本で、得点は1であった。

ミスパスの軌跡を解析すると、縦パスを奪われる回数が圧倒的に多かった。ただ、ペナルティエリア付近では何度かななめや横のパス（クロ

REGULATION



スケジュール

1日目：1・2回戦

2日目：準決勝・決勝

試合時間：40分（20-10-20）

ス)が見られ、中盤では横幅を広く使って攻撃を組み立てようとするチームもあった。

データからも、細かくパスをつなぐというよりは、少ないパスで攻撃をしかけ、成功の確率は低くてもゴールへ向かおうとする傾向がわかる。

(2)準決勝も含めた傾向

ゴール方向を意識した縦のボールを選択することが多く、そのことは攻撃の優先順位としては間違っていない。そのためのポジショニングやアクションを意識していることはよいことである。

しかし、相手との駆け引きの中で、その状況下における判断の質という側面においては、物足りなさを感じた。縦に急ぐことで、横や後ろの選手との関わりが薄くなり、ピッチ上の全選手に攻撃に関するスキルアップをする機会があるかといえ、なかなかそういう試合にはなっていないという傾向であった。

ただし、数名の選手は、まわりをよく観て状況によつて的確な判断とプレーの実行ができていることも見えた。

早い展開の中で常に状況把握と判断を続けることは容易ではないが、結果を求めることや失敗を回避する

ことばかりに目を向けず、子どもの成長を促す指導にもトライしてほしい。

3. 攻守の一体化

(1)ビルドアップ

チームによっては、GKからしっかりとつないでゴールへの組み立てを試みようとしている場面があった。ただ、それを成功させる技術として、味方の選手のポジションをとる意識や正しいポジションの認識・アクションの方向とタイミングなどの技術がまだ身に付いておらず、成功している場面は少なかった。

ピッチや風の状況も少なからず影響していると思われるが、ビルドアップの意識が皆無と思われる選手も多く見られたので、今後のリーグでトライしてほしいと感じた。

(2)ミドルサードの攻防

守備の改善点としては、スペースを守るということにトライしてほしい。チャレンジの優先順位が、まずインターセプトということからすると、そのための適切なポジションをとる必要がある。相手が多くを選択肢をもってボールを保持しているときに、人につきすぎてしまうと、返って相手にスペースを与えてしまう結果になることが多い。



「攻守に渡って個のプレーの向上」 sss 鈴木政裕

5年生の途中から常に関わりを意識した個のプレーの向上を目指している。たとえば、トップやボランチを意識して、そこに入ったときに関わられるようになってきた。

今大会では、うまくボールを動かせていないが、そのような中でも動き直しをして、次の選択肢を生み出せるようにすることが課題ととらえている。たとえば、ボールに近づくような斜めの動きや、サイドのスペースを生かせるような動き、前を向いているなら追い越す動きなど、それぞれが判断して、崩すことを取り組んできた。

選手に期待したいのは、バイタルエリア付近での攻撃のためのアイデアや個の守備の発揮である。特に、全国では守備の大切さを痛感してきたので、対人の強さだけでなく奪うのかゴールを守るのかという判断も要求していきたい。

クラブとしては、常に個の仕掛け・ドリブルを軸としてそれに関わるプレーの質の向上を目指してきたので、今後も継続していきたい。



FINAL



この試合でも、そのような場面が多く、簡単にFWにくさびのパスや背後へのパスを通させてしまっていた。ただ、そういう場面が多くあったことで、相手のパスを読んで、徐々に奪うための技術が向上したセンターバックがいたことは成果といえる。

ただし、この年代で大切なことは、まずは守備の個人戦術であり、ボールを奪おうとする意識である。その意味では皆その意識は高いといえるので、今後のステップアップとしてスペースを守る守備にもトライしてほしい。

攻撃に関しては、前述した守備の状況の中では、組み立てをしてゴールへ向かうというよりは、簡単に前方へ送ることで有利な状況を生み出していた。また、ボランチの選手に対するサポートとしては、サイドの選手が広がりをもつことで関わるが多かったが、状況によってはもっと近くでサポートしたほうが有効な場面もあった。

例えば、広がりを持ってボールを前に運んでいくと、相手がピッチ全体の縦のコースを防いでいるような場合に、ギャップを覗いたり、実際

に入っていくたりすること
で、味方に複数の選択肢を

もたせることができる。すると、サイドバックが攻撃参加する場面も増えるのではないだろうか。

この年代では、多くの選手が攻撃に参加することを求めたい。今後は選手のアイデアを引き出しながら、さらに数多くの戦術を獲得していくことに期待したい。

(3)ゴール前の攻防

攻撃としては、個人のスピードとテクニックで突破を試みることが多かった。味方が前を向いてドリブルしている状況では、多くの選手がスペースを見つけて関わっている場面が見られた。特に、オーバーラップやそこからのクロス、相手に一旦奪われても素早いプレスで奪い返したりセカンドボールを拾って攻撃を展開していた。

一方で、相手を崩しながらゴールに迫るシーンは少なかった。今後期待したいプレーとしては、1対1で仕掛けながら味方の状況を観て選択肢を持ってプレーするほうが有利に展開でき相手を崩して突破できる場面では、その判断を的確に実行することである。

北海道の選手は、個々の技術は高いといえるので、その関わりの質を高めていけば、もっとその能力を伸ばすことができるのではないだろうか。

「個の養成」 FC DATE 福山 文夫

コンセプトは「個の養成」。つまり、小学生のうちは個で仕掛けたり個で守ったりできる選手を育て、中学校に上がって組織のプレーができるように養成したいと考えて臨んでいる。昨年(5年生)の大会で地区予選で負けたときは、個でトライすることができていなかった。だから、それを冬場に徹底して今大会に臨んだことで、個で打開するという意味では成果が出ている。

今後の課題は、「判断力を身につけること」たとえば、ドリブルで相手を抜き去ったとしても、その先にもう一人守備がいる場合、それをまた抜いていくというのではなく、ワンツーなどのプレーを選択していくということである。ただ、先にパスサッカーを覚えてしまうと、その先ドリブルをさせるのは困難。

だから、今は中学校と連携してステップアップを意識した個の育成を考えて指導している。

卒団した子たちが上の年代で活躍しているのを見ると素直にうれしい。我々は、そのために取り組んでいきたい。



4. GK

(1) 成果

1) 攻撃の起点としての役割

今大会では、GKの効果的なスローイングから攻撃に結び付いた場面が多く見られた。味方やスペースの距離に応じて、オーバーアームスローとアンダーアームスローを使い分け、攻撃の優先順位を意識しながら、味方がコントロールしやすい質の良いボールを配給していた。

2) 「キャッチング」の向上

相手のシュートに対し良い準備をしていたことで、一回でボールをつかむ場面が多く見られた。また、コーナーキックのセットプレー時においても相手選手と競り合いながら、高い位置でボールをつかみ、安全確実に処理していた場面が見られた。

3) ブレイクアウェイの状況に対応する意識

相手が自分たちのペナルティエリアに入ってきた時に、シュートコースを切りながらボールに寄せ、しっかりと面を作りブロックしていた。

(2) 課題

1) ポジショニングの修正

相手のミドルサードやディフェンディングサードにボールがある時も、ボールとゴールの中心を意識してポジションをとり続ける。そして左右だけでなく前後も意識することで、守備範囲を広げ、より早く判断しプレーすることにつなげていきたい。

2) 予測からチャレンジ

「自分とボール」の関係だけではな

く、相手と味方も視野に入れて、予測をもっと多くし、勇気を持ってもっとチャレンジしていく。それが味方を助けるコーチングやボールを奪うこと、そして効果的な攻撃につなげていきたい。

3) 攻撃の起点としての役割

相手からボールを奪ったら、効果的なビルドアップのプレーとしての質を高めていきたい。決勝戦では、GKのスローやキックから攻撃の起点となった場面が多く見られた。今後もGKが攻撃の起点として役割を果たす場面を多くしたい。時には相手の状況に合わせて近くのFPにつけて、中盤から後方のスペースを利用することもあっていい。状況を読んで、的確なプレーを選ぶ力をつけたい。そのためには、キックとスローの質を向上させ、相手にロングキックに対する脅威を与えることも必要である。

5. まとめ

どのチームも個の育成に取り組んでいることが伺えた。今後の課題はそれら個をさらに大きなものにしていくと同時に、状況に応じた関わりをプレーとして具現化することである。多くの選手が将来さまざまなステージで活躍できるよう、技術委員会としても貢献していきたいし、チームをサポートしていきたい。

最後に、このTSGレポート作成にあたりまして協力いただきました大会及びチーム関係者の方々に感謝申し上げます、お礼のことばといたします。

主催者コメント

(公財)北海道サッカー協会 4種委員長：神谷敦

今大会は、全国大会につながる大会として、チーム単位での取り組みの指標になるとともに、この大会があることで、チーム登録し、協会の普及につながっているという側面がある。

また、個の育成という意味では、8人制に移行してから1対1のプレーが増加し、個のプレーの機会は増加している。そのための基本的な技術の向上に寄与していることは確かである。

一方で、個のストロングポイントを活かすプレーの質の向上については今後の課題である。

来年度からは12月に全国大会があるので、リーグ戦を通してつけてきた力が、10月の全道大会で発揮されることを期待している。

PLAYERS FIRST



TSGメンバー

- ・ 國田 英一郎
(チーフ・遠軽南中学校)
- ・ 小林 俊也
(ゲーム分析・恵庭南高校)
- ・ 伊藤 公
(GK分析・コラソン Ke FC)
- ・ 永田 壘
(ゲーム分析・ニの坂JSC)

- ・ 新谷 和彦
(データ解析・北辰中学校)
- ・ 神田 法人
(映像解析・空知トレセン)
- ・ 松井 芳樹
(データ解析・愛宕サッカー少年団)

出場チーム

- ・ SSS札幌A (札幌)
- ・ LIV FOOTBALL CJUB A (札幌)
- ・ 篠路FC (札幌)
- ・ 室蘭大沢FC (道南)
- ・ FC砂川 (道央)
- ・ 遠軽はやぶさ (道東)
- ・ 旭川ネイバーズ (道北)
- ・ FC DENOVA (札幌)
- ・ FC DATE RED (道南・室蘭)
- ・ FORCA YOICHI JFC (道央)
- ・ 北陽A (道央・千歳)
- ・ 東川 (道北・旭川)
- ・ プロGRESSIO十勝FC (道東)
- ・ 幕別札内FC (道東)
- ・ ジュニオーレFC (道南・室蘭)
- ・ エスピーダ旭川 (道北)